

## 「教育実習」調査研究の可能性 ——「教育実習」調査票試案の作成——

伊 藤 友 子

### 要 約

「教育実習生」は、大学生という身分のままで、「学校」という教育現場に行き、指導教諭の指導の下、「教師」になるための「実習」を経験する。「教育実習」は、大学のカリキュラムでありながら、その実態や内容は、大学の教職課程担当者にも把握しにくい面がある。そのため、「教育実習」調査研究は、他の調査研究に比較すると、その実態把握を第一の目的にするものが多い。それゆえ、「教育実習」調査研究においては、選択肢形式の回答から得られる「量的データ」の分析が有効となる。

また、将来の職場と考えられる「学校」での実習体験は、学生に、より多くのインパクトを与える。特に、そこでの「教育実習生」の思いや意識という内面的な問題を考察するには、選択肢形式の回答から得られる「量的データ」だけでなく、自由記述形式の回答から得られる「質的データ」をより重要視し、詳細に分析することが必要である。

以上の分析を基に、「教育実習」調査票の試案を作成した。

最後に、「教育実習」研究の課題として、「実習記録」等を分析・考察する「質的研究法」の必要性を指摘した。

### はじめに

大学において教職課程を履修する学生にとって、主に最終学年に実施する「教育実習」は、文字どおり教職課程教育の集大成としての性格をもつ。それは、「教育実習」が、次のような意義をもつからである。

「教育実習は、学校教育の枢要な活動領域を実際的に体験することを通して、①これまで講義で学んできた諸理論を教育の現場で検証し、②学校および教職（教師集団）の実状についての認識を深め、③教職に要請される専門的知識や実践的技術の輪郭（広がりとお行）を把握し、④さらに、個々の教師の日常的な仕事の内実に触れることによって、教職を志望する自己にとっての新たな必要課題を発見するための、貴重な経験学習の機会である。」（岩永，1996，2頁）

それでは、「教育実習」が教職課程教育において、極めて重要な意義をもつということは確かであるが、「教育実習」についての研究は、どのようなになされてきたのだろうか。

まず、「教育実習」を扱った書物は、今までにも数多く存在している。しかし、それらの多くは、「教育実習」へ臨む学生向けの事前指導用の教科書としての性格が強い。

また、「教育実習」を論じた研究は、大学教育における教師養成教育の理念、とりわけ戦後の一般大学において教師教育を実施する際に掲げられた「開放制教師教育」の理念を再確認するという性格の研究が多い。

そして、1980年代以降、比較的数量多く存在している実証的研究である「教育実習」調査研究は、次のような「教育実習」の性格のため、いくつかの特徴をもつ。

すなわち「教育実習」は、大学の「教職に関する科目」のなかでも、極めて特殊な性格をもつ。というのも、他の教職科目が、大学の授業を中心とするカリキュラムのなかに位置付けられるのに対し、「教育実習」は、学生が大学外の「実習校」において、指導教諭の指導の下、実際の生徒を相手に教育活動を実施するからである。それゆえに、大学の教職カリキュラムとはいえ、大学の教職担当教員が、「実習校」を訪問し研究授業を観る程度では、「実習生」の活動の詳細を把握することに、当然限界を生じる。一般的には、実習後の反省会等においての「実習生」の発言や実習生自身がその期間中に記す「教育実習記録」、及び、指導教諭等が記す「教育実習評価票」の所見等か

ら読み取る以外、有効な方法はない。

従って、「教育実習」を扱った調査研究は、第一にその「実習」の実態を明らかにすることを主要な目的にするものが多い。

第二には、その実態を把握する目的の調査研究であっても、同時にそれは、当該大学のその後の教職課程履修学生の「教育実習」の事前指導に利用される目的をもつのは当然である。従って、授業実習、生徒指導や学級経営に関する実習について、多角的に調査するという側面をもつ場合が多い。

第三には、その調査研究を通して、学生自身の「教職観」の変化や構築度等を分析しようとするものもある。

本論文においては、以上のような「教育実習」調査研究の特徴をふまえ、まず「教育実習」調査のデータについて考察する。そして、その考察を参考にし、「教育実習」調査票の試案を作成し、「教育実習」研究の可能性を探ることを目的にする。

## I 「教育実習」調査研究における「量的データ」と「質的データ」

本章においては、先行研究を基に、「教育実習」調査研究のデータについて考察する。なお、ここでとりあげるのは、量的調査である調査票調査である。質的調査ともいうべき質的研究法については、III章で「教育実習」研究の質的研究法の可能性を探る際に扱う。また、本論文で「量的データ」というのは、統計処理されたデータであるが、「質的データ」というのは、一般的に社会調査の中で質的調査と呼ばれる「事例調査法」「自由面接（インタビュー）法」「参与観察法」「生活誌法」から得られるデータだけを意味するではなく、調査票調査の自由記述回答から得られるデータ（厳密には不（非）定型データと呼ばれる）も含むことにする。

まず、「教育実習の実態」と「実習生の意識の把握」を目的とする調査の結果を分析・考察した研究が存在するが、その際に利用されたデータは、「後輩へ伝えたいこと」と「教育実習についての感想・意見・批判・疑問等」以外

の項目は、すべて選択肢形式の統計処理された「量的データ」である。(野島, 1984, 37～61 頁) また、その研究において、前述した自由記述形式の2つの回答から得られる「質的データ」の分析は、割愛されている。

同様に、「教職志向・教師像・教職観・教職適性感についての学生の意識の実態把握」及び、「それに与える教育実習の影響の考察」を目的にした研究では、すべて選択肢形式から得られる「量的データ」を駆使して、分析・考察にあたっている。(若原・佐藤, 1984, 1～15 頁) また、同研究は、「教育実習経験の自己評価についての意識の実態把握」と「教育実習の学生に及ぼす实际的効果の考察」についての研究につながられている。そこでは、「実習の体験は今後の自己の生き方にどうかかわると思いますか。」という選択肢形式の質問項目のみ、肯定的な回答(「非常にプラスになる」「ややプラスになる」)をした学生に、その内容を具体的に記述させているが、それから得られる「質的データ」以外は、分析に利用されているのは、すべて統計処理された「量的データ」である。(若原・佐藤, 1985, 27～35 頁)

なお、選択肢形式の質問項目から得られる、統計処理された「量的データ」は、他の大学の「実習生」のデータとの比較を容易にするメリットをもつ。その例として、「当該大学の教育実習の特徴と教育実習生の教職観の特性の把握」を目的として、一部の質問項目を全国調査と同一にした調査を実施し、そこから得られた量的データを分析した研究が存在する。(曾我・河野・村島・小山, 1984, 101～131 頁)

しかし、前述したように、量的調査である調査票調査の中にも、ほとんどの場合、自由記述形式で答える質問項目が設定されている。ただ、その際の記述式項目の取り扱い、その調査の項目の全体像を明らかにするために利用されている場合が多い。すなわち、量的に統計処理されたデータからは読み取れない(或いは、読み取りにくい)事柄を、より詳細に意味づけるために利用されるのである。

従って、多くの「教育実習」調査研究においても、ほとんどの場合、この自由記述の項目が設定されている。しかし、その分析や考察の方法には、研

究者のその「質的データ」への考え方等により、若干差異が見られる。

まず、「教育実習前後の学生の『教職』への意識変容とイメージ変容の把握」を目的にする調査研究で、ほとんどの質問項目は、統計的处理できる選択肢形式の回答（量的データ）であるが、最後に（実習前後の）実習生の手記を1～2行ずつそのまま記載する方法の研究が存在する。（平岡、1995、31～55頁）。

また、「カリキュラム改革後に実施された教育実習の教育効果と問題点を実習生の側からの評価を通して分析すること」を目的とする調査で、選択肢形式の回答（量的データ）に続いて、その項目について具体的に記述（質的データ）させる研究も存在する。（徳岡・田中・園山、1995、199～208頁）特に、その中でも、「教育実習を終えた時点での自分自身の教師としての特性を長所と短所という観点から述べる。」「教育実習の改善点・努力点を述べる。」という質問項目を自由記述で答えさせることにより、各々の選択肢形式の回答からえられたデータを、より詳細に意味づけようとしている。

しかし、「教育実習」調査ではないが、この自由記述形式の回答を「質的データ」として、より重点的に分析する研究が存在する。自由記述をいくつかのカテゴリーに分類し、そのカテゴリーごとになるだけ生のままの記述を記載し、そこでの意味を読み取っていかこうとするものである。その例として、平成7年に国立大学協会が実施した国立大学大学院の教員に対する量的調査から、大学院の拡充期にある国立大学の教育と研究の課題について教員の立場から問題点を明らかにすることを目的とし、自由記述形式の回答の例示と再コード化により、教育研究活動の問題点を集約した研究があげられる。（藤村、1998、99～115頁）藤村は、その研究のなかで、自由記述形式の回答を分析する理由として「このような自由回答の分析を行うのは、自由回答そのものの『おもしろさ』もあるが、現在進行中の大学改革、大学院の重点化・量的拡張政策下において、我が国の国立大学が抱えてきた構造問題の一端が見い出されると考えられるからである。国大協調査における自由回答はサンプル全体の17%（5400件）に過ぎないが、重点化政策を契機に広範囲な不満のあるこ

とが読みとれる。その不満の大方は、施設や予算のハード面に関わる指摘であるが、分野、階層、大学類型ごとに回答のニュアンスが異なり、選択回答では得られない様々な問題が潜んでいると思われる。」と述べている。すなわち、生のデータを示すことにより、「量的データ」からは読みとりにくい「教員の不満」という気持ちや意識というソフト面を詳細に意味づけようとするものである。

同様に、自由記述形式の回答を中心に分析・考察した研究の例として、「卒業生の大学評価」のための調査のなかの自由記述形式の回答を、「質的データ」として利用し、「思い出からみた大学のイメージ」「卒業後の生活に対する大学教育の意味」「母校を卒業したことに対する評価（長所・短所）」「子どもの進学先としてみた『自分の母校』観」「卒業生の大学生への期待と大学生生活観」のカテゴリーごとに分析し、卒業生の大学に対する意識や評価の実態を明らかにしたものがあげられる。（牧野・村松，1993，249～260）さらに、村松は、その分析結果の考察によってたてられた「卒業生の価値志向により大学評価は異なる」という仮説を検証しようとして、その調査における自由記述項目である「母校での学習・生活体験が与える卒業後の生活への影響」と「母校卒業に対する評価（長所・短所）」から得られた「質的データ」をもとに、大学評価に関する15項目を抽出し、それぞれにプラスの評価（長所）とマイナスの評価（短所）として、数値であらわしている。（村松，1995，293～304頁）ただし、村松も指摘するように、この数値は、「質的データ」の解釈を助けるためのものであり、「量的データ」として利用された研究ではない。

以上、「教育実習」調査研究における、統計処理できる選択肢形式の回答から得られる「量的データ」と自由記述形式の回答から得られる「質的データ」の活用を中心に論じてきた。その結果、次のようなことが考察された。

まず「教育実習」調査研究は、前章で論述したように、その実態把握を第一義的な目的にする必然性を有している。しかし、その実態は、「中学校」や「高校」という学校段階によって、大きく異なっている。そして、同一学校段階においても、設置者の違い（公立か私立か）や、地域や学校規模の違い、

または「実習教科」の違いによって、その実習の実態は異なっている。また、大学の实習方針によっても、実習の実態は、大きく異なっている。(母校実習なのか、付属校やその地域の母校以外の学校での実習なのか) すなわち、そこでの研究は、大学ごとに異なる「教育実習」の実態と、実習校ごとに異なる「教育実習」の実態の詳細を明らかにするための調査研究となる。

従って、「教育実習」調査研究の多くは、統計処理される選択肢形式の量的な調査研究の方法をとる場合が多い。そして、そこで得られる「量的データ」の活用度も高い。

しかし、自由記述形式の回答から得られる「質的データ」を、統計処理される選択肢形式の回答から得られた「量的データ」の解釈を裏付けるためだけに利用するのではなく、もっとより積極的に利用し、研究の中心に位置付ける方法も、「教育実習」調査研究にとって有効と考えられる。なぜなら、「教育実習」の体験は、文字どおり、「教えられる」側から「教える」側への意識の転換を意味する。学生は、その視点の変化に伴って多くのことを感じ、悩み、そして考えていく。そのような気持ちや意識という人間の内面に深くかかわる問題は、選択肢形式の回答から得られる「量的データ」からだけでは、なかなか詳細に把握することは困難である。従って、そのような「実習体験」における学生の思いや意識を扱う項目は、できるだけ自由記述形式の質問にし、その記述回答を生データとして分析することも、学生の「実習体験」をよりリアルに再現する意味においてより重要であろう。

## II 「教育実習」調査票試案

本章では、前章において考察した「教育実習」研究の方法論を参考に『「教育実習」調査票試案』を作成する。その際には、平成8年度に実施した本学学生の「教育実習・教育実習指導アンケート」の分析・考察を基にする。なお、当アンケートは、「教育実習」調査票のためのプリテストとして作成したものである。そのため、質問項目に対する回答は、ほとんど記述式である。



また、本学は、平成9年度から、外国語学部では「英語」「中国語」「韓国語」の中学校教諭1種・高校教諭1種免許、社会福祉学部では「社会」の中学校教諭1種免許と「地理歴史」「公民」の高校教諭1種免許取得のための「教育実習」を実施している。しかし、ここで分析に使用するアンケートの実施時期である平成8年度には、両学部ではまだ「教育実習」を実施していなかったため、利用データがない。従って、ここでは、商学部と経済学部の学生用の『『教育実習』調査票試案』を作成する。

### 1. 属性と基本的項目について

属性項目は、所属学科と名前を記させたため、特別には設けていない。しかし、記名させることは、回答する学生にとって、少なからず心理的圧迫感を与えることになるため一般的な調査では、無記名形式をとることが多い。当調査票においても、無記名式にするが、所属学科については、複数の学科で同一の教科の実習をする場合があるため、所属学科による学生の特徴を把握するために記す必要がある。

また、母校実習でない学生に実習校名を聞くことは、学生本人の特定につながる場合もある。しかし、本学は、母校に取得予定の免許教科の課程のない学生が多い（商業・中国語・韓国語）ため、その課程を有する県内の高校に特別に実習を依頼している。よって、それらの学校での実習の実態把握は、その学校との実習における関係維持と、その後の学生の実習のための大学での事前指導にもとりわけ重要になってくる。

Q1. あなたについて聞きます。

SQ1. 性別を教えてください。

SQ2. 所属学科を教えてください。

SQ3. 取得予定の教科名を教えてください。

Q2. 実習校について聞きます。

SQ1. 中学校でしたか、高校でしたか。 1. 中学校 2. 高校

SQ2. 実習校はあなたの出身校でしたか。



1. はい            2. いいえ→実習校名 (            )

SQ 3. 実習校の所在地はどこですか。

1. 熊本市内            2. 熊本県内            3. 熊本県以外の九州地域  
4. 九州地域以外

## 2. 実習校の事前指導と学生の準備について

実習校訪問の時期と回数は、学生によってかなりばらつきがある。1年以上前に訪問している学生がいるが、これは実習予定の母校に中学校・高校時代の担任教師やクラブの指導教師が在職し、かつ大学に入ってもその関係を密に保っている学生がほとんどである。しかし、反対に1週間～10日位前に初めて実習校を訪問している学生が存在する。市内の中学校で実習予定の学生である場合には、熊本市の中学校と県内の大学との取り決めには則っているためで致し方ないが、それ以外の学校の場合は、実習校の事情を考慮して、大学の事前指導のなかで学生の不安を除く工夫が必要になってくるかもしれない。(大学では、約1ヵ月前にはすべての学生に実習校に連絡をするように指導している。)

次に、事前指導での指導内容であるが、「学校施設の案内」から「担当教師の紹介」「担当教科目及び授業範囲の指示」「教材研究への要望」「指導案の様式説明」「校則についての説明」「教職志望の有無の確認」等まで多岐にわたっている。前述したように、「教育実習」調査の第一の目的が、実習の実態把握という以上、これらの多岐にわたる項目を無理にカテゴリー化することには、あまり意味がない。従って、なるだけ、その項目を調査票に選択肢としてならべ、複数選択の形で答えさせたい。

なお、その他の項目を作り、その内容を記述するようにしたい。

Q3. 実習校の事前指導について聞きます。

SQ 1. 実習校訪問について

1. 最初に実習校に行ったのはいつですか。(実習の内諾をもらいに行った時期は除く。)  
ア. 1年以上前    イ. 半年以上～1年未満    ウ. 4ヵ月以上～半年未満

エ．2カ月以上～4カ月未満 オ．1カ月以上～2カ月未満  
カ．3週間以上～1カ月未満 キ．2週間以上～3週間未満  
ク．1週間以上～2週間未満 ケ．1週間未満（ 日前）

2．実習前に何回行きましたか。

ア．5回以上 イ．4回 ウ．3回 エ．2回 オ．1回

3．その時実習校からどのような指導を受けましたか。次の中から該当するものをすべて選んでください。

ア．学校施設の案内 イ．担当教師の紹介 ウ．担当学級の指定

エ．実習期間(期日)の指示 オ．実習中のスケジュール(行事等も含む)の説明

カ．出勤時間等の指示・説明 キ．服装指導 ク．宗教行事等の説明

ケ．担当教科目の指示 コ．担当教科目の授業範囲の指示

サ．授業実習の指導 シ．教材研究の指導（要望等も含む）

ス．研究授業の指示・説明 セ．指導案の様式説明 ソ．教科書配布

タ．担当クラスの生徒の学力等の説明 チ．校則についての説明

ツ．生徒指導等のアドバイス テ．教師志望の有無の確認

ト．実習への意欲や姿勢の指導 ナ．校長先生の講話

ニ．教頭先生の講話 ヌ．その他（ ）

次に、実習教科や授業の範囲についての事前打ち合わせのことである。授業実習は、「教育実習」のなかでも最も大きなウエイトを占めているために、学生にとって実習前の一番の関心事であり、同時に不安項目でもある。そのため、実習予定の学生たちは、少しでも早い時期に、実習で教える科目（商業や地歴・公民の免許を取得する学生は、複数科目の授業実習を実施する場合も多い）や分野（中学校「社会」の免許を取得する学生は、「地理」「歴史」「公民」の3分野の授業実習の可能性がある）が決定し、かつ、その授業範囲を知ることを望む。また、実習直前に、予定していた科目の変更が告げられることもある。免許取得予定の科目は、すべて万遍なく学習をし、教壇実習に備えることが当然ではあるが、自分の専攻に比較的遠い分野の科目（例えば、地理や歴史等）の場合には、非常に慌てる学生もいる。

従って、本学の場合には、「商業」「地理・歴史」「社会」の免許を取得する

学生に、事前にすべての科目の十分な学習の必要性を認識させるためにも、その実状を把握することが重要になる。(なお、試案に記載している科目は、基になるアンケート実施時期の関係上、新「学習指導要領」によってはいない。)

SQ 2. 実習校との担当科目等の打ち合わせについて聞きます。

1. 担当科目(実際に担当した科目)を具体的に知ったのはいつですか。

ア. 半年以上前 イ. 3ヵ月以上～6ヵ月未満 ウ. 2ヵ月以上～3ヵ月未満  
エ. 1ヵ月以上～2ヵ月末 オ. 1週間未満( 日前)

2. 事前に指示されていた(約束されていた)科目が変更になった人のみ答えてください。

ア. それを知らされたのはいつですか。

a) 3ヵ月以上前 b) 2ヵ月以上～3ヵ月未満 c) 1ヵ月以上～2ヵ月未満  
d) 3週間以上～1ヵ月未満 e) 2週間以上～3週間未満  
f) 1週間以上～2週間未満 g) 1週間未満( 日前)

イ. 予定されていた科目は次のうちどれですか。

a) 日本史 b) 世界史 c) 地理 d) 公民 e) 歴史的分野(中学校)  
f) 地理的分野(中学校) g) 公民的分野(中学校) h) 流通経済  
i) 商業法規 j) 簿記 k) 会計 l) マーケティング  
m) 情報処理(プログラミングを含む) n) 計算事務 o) その他( )

ウ. 変更後の科目は次のうちどれですか。

a) 日本史 b) 世界史 c) 地理 d) 公民 e) 歴史的分野(中学校)  
f) 地理的分野(中学校) g) 公民的分野(中学校) h) 流通経済  
i) 商業法規 j) 簿記 k) 会計 l) マーケティング  
m) 情報処理(プログラミングを含む) n) 計算事務 o) その他( )

3. 担当科目のどこを(何ページから)教えるのを知ったのはいつごろですか。

ア. だいたいどの辺りというのを知ったのはいつごろですか。

a) 1ヵ月位前 b) 3週間位前 c) 2週間位前 d) 10日位前  
e) 1週間位前 f) 3日～5日位前 g) その他( )

イ. 正確に何ページからというのを知ったのはいつですか。

a) 3週間位前 b) 2週間位前 c) 10日位前 d) 1週間位前  
e) 5日位前 f) 3日位前 g) 前日 h) その他( )

## 4. 教科書や資料集はどうしましたか。

ア. 実習校から借りた。 イ. 自分で買った。 ウ. その他( )

それでは、学生は、実習に備えて、どんな準備を始めているのだろうか。この質問項目に対しては、「友達同士での模擬授業」「教材研究（図書館で資料等を調べる。教科書を読み込んでいく。）」「教える範囲がわかってからの教材研究」「授業計画」「板書の工夫」「指導案作成」「プリント類の準備」等、授業実習への準備がほとんどであるが、その他には「顔写真を借り生徒の名前を覚える」「服装等の準備」等が答えとしてあがっている。

また、その時期に関しては、3年生の夏休み頃というように実習を実習校に正式に依頼する時期から、実習開始直前（3日前）まで、多様である。

SQ 3. 実習開始までに実習に備えて、次のような準備をいつごろから始めましたか。

## 1. 友達同士で実施する模擬授業

ア. 3年生夏休み イ. 3年生秋ごろ ウ. 3年生後期（年明け）  
エ. 3ヵ月位前 オ. 2ヵ月位前 カ. 1ヵ月位前 キ. 3週間位前  
ク. 2週間位前 ケ. 1週間位前 コ. 3日位前（直前） サ. その他( 位前)  
シ. 実施していない

## 2. 教材研究（図書館で資料を調べる・教科書を読み込んでいく）

ア. 3年生夏休み イ. 3年生秋ごろ ウ. 3年生後期（年明け）  
エ. 3ヵ月位前 オ. 2ヵ月位前 カ. 1ヵ月位前 キ. 3週間位前  
ク. 2週間位前 ケ. 1週間位前 コ. 3日位前（直前） サ. その他( 位前)  
シ. 実施していない

## 3. 教える範囲がわかってからの教材研究（授業計画・指導案の作成・板書計画・プリント類の用意）

ア. 3ヵ月位前 イ. 2ヵ月位前 ウ. 1ヵ月位前 エ. 3週間位前  
オ. 2週間位前 カ. 1週間位前 キ. 3日位前（直前） ク. その他( 位前)  
ケ. 実施していない

## 4. 顔写真を借り名前を覚える

ア. 3ヵ月位前 イ. 2ヵ月位前 ウ. 1ヵ月位前 エ. 3週間位前  
オ. 2週間位前 カ. 1週間位前 キ. 3日位前（直前） ク. その他( 位前)

ケ．実施していない

5．服装や持ち物の準備

ア．3ヵ月位前 イ．2ヵ月位前 ウ．1ヵ月位前 エ．3週間位前

オ．2週間位前 カ．1週間位前 キ．3日位前(直前) ク．その他( 位前)

ケ．実施していない

6．その他( )

ア．3年生夏休み イ．3年生秋ごろ ウ．3年生後期(年明け)

エ．3ヵ月位前 オ．2ヵ月位前 カ．1ヵ月位前 キ．3週間位前

ク．2週間位前 ケ．1週間位前 コ．3日位前(直前)

サ．その他( 位前)

### 3．授業実習について

前節でも述べたように、「教育実習」のなかで、授業実習の占めるウエイトは最も大きい。従って、学生が実際どのような授業実習を実施し、また指導を受けているのかを把握することは、極めて重要になる。また、授業実習に臨んで、学生がどのような教材研究をしたのかということを具体的につかむことは、学生の事前指導だけでなく、大学の「教職カリキュラム」のなかの特に教科教育法においても重要な課題を提起するものとなる。

まず、授業実習の時間数であるが、これは、当大学から、10～15時間という目安を各実習校に示していることあり、大体その範囲内に収まっている。しかし、「一つの実習校に同じ教科の実習生が多数いる」「当該教科の開設授業時間数が少ない」というような実習校の様々な事情から、「指導教諭やベテランの教師の授業をなるべく多く参観させる」「1時間の授業実習の教材研究に多くの時間をかけさせる」「なるべくたくさんの授業実習をさせる」といった実習校や指導教諭の方針まで、様々の要因により、その時間数にも、多くのバラツキがある。よって、授業実習の時間数を問うことは、実習生の授業の実態の把握というだけでなく、各々の実習校の授業に対する考え方や指導教諭の授業観を知る意味でも意義深いことである。

また、前述したように、「商業」と「地歴・公民」や「中学社会」の免許を取得する学生の場合、複数教科や分野の授業実習を実施することが比較的によくあるが、その際の時間数の把握も必要である。

Q4. 授業について聞きます。

SQ1. 教科指導時間数はどれくらいでしたか。

1. 参観時間を次の中から選択してください。

- ア. 1～2時間 イ. 3～4時間 ウ. 5～6時間 エ. 7～8時間  
オ. 9～10時間 カ. 11～15時間 キ. 16～20時間 ク. 20時間以上  
ケ. 参観していない

2. 授業実習時間を次の中から選択してください。

- ア. 1～2時間 イ. 3～4時間 ウ. 5～6時間 エ. 7～8時間  
オ. 9～10時間 カ. 11～15時間 キ. 16～20時間 ク. 21～25時間  
ケ. 25時間以上

3. 担当した科目(a～m, 道徳は除く)の授業実習時間数(ア～ケ)を選択してください。＜科目, 時間数ともに該当する記号に○をつけてください。なお、複数の教科を担当した場合は、時間数の多い順に記入＜①～④＞してください。＞

- ① a)日本史 b)世界史 c)地理 d)公民 e)歴史的分野(中学校)  
f)地理的分野(中学校) g)公民的分野(中学校) h)流通経済  
i)商業法規 j)簿記 k) 会計 l)マーケティング  
m)情報処理(プログラミングを含む) n)計算事務 o)その他( )

- ア. 1～2時間 イ. 3～4時間 ウ. 5～6時間 エ. 7～8時間  
オ. 9～10時間 カ. 11～15時間 キ. 16～20時間 ク. 21～25時間  
ケ. 26時間以上

- ② a)日本史 b)世界史 c)地理 d)公民 e)歴史的分野(中学校)  
f)地理的分野(中学校) g)公民的分野(中学校) h)流通経済  
i)商業法規 j)簿記 k)会計 l)マーケティング  
m)情報処理(プログラミングを含む) n)計算事務 o)その他( )

- ア. 1～2時間 イ. 3～4時間 ウ. 5～6時間 エ. 7～8時間  
オ. 9～10時間 カ. 11～15時間 キ. 15時間以上

- ③ a)日本史 b)世界史 c)地理 d)公民 e)歴史的分野(中学校)

- f) 地理的分野(中学校) g) 公民的分野(中学校) h) 流通経済  
 i) 商業法規 j) 簿記 k) 会計 l) マーケティング  
 m) 情報処理(プログラミングを含む) n) 計算事務 o) その他( )
- ア. 1～2時間 イ. 3～4時間 ウ. 5～6時間 エ. 7～8時間  
 オ. 9～10時間 カ. 11～15時間 キ. 15時間以上
- ④ a) 日本史 b) 世界史 c) 地理 d) 公民 e) 歴史的分野(中学校)  
 f) 地理的分野(中学校) g) 公民的分野(中学校) h) 流通経済  
 i) 商業法規 j) 簿記 k) 会計 l) マーケティング  
 m) 情報処理(プログラミングを含む) n) 計算事務 o) その他( )
- ア. 1～2時間 イ. 3～4時間 ウ. 5～6時間 エ. 7～8時間  
 オ. 9～10時間 カ. 11～15時間 キ. 15時間以上

上述したように、取得教科によっては授業実習の予定科目が変更されることもよくあるが、特に「商業」の場合、科目の種類が多いことから、実習中に予定外の科目を担当するように勧められることもある。それは、「簿記」や「情報処理」といった正式の科目から「簿記検定」等の課外授業まで含まれる。そして、学生は、担当できなかった理由に、「技術的に無理」「教材研究の時間がとれない」「実習前の準備不足」等をあげ、かつ「悔しく情けなかった」「生徒に申し訳なかった」「予想できたので事前に勉強しておくべきだった」等の感想を述べている。

従来から大学での事前指導等で、その可能性（予定外の科目担当）を示唆し、それに対する準備を促してはいるが、学生にその効果があり見受けられなかった。その際、実習生（先輩）が、それにどう対応したか（担当した・担当しなかった）、また、その反応の理由やその時の気持ちを明らかにすることによって、学生に現実感を持たせることが容易になろう。なお、その場合は自由記述式の質問にしたい。

SQ2. (商学部の学生のみ答えてください。他学部の学生は、SQ3に進んでください。)

1. 実習期間中に、予定されてなかった科目の担当を勧められましたか。(正式の授業科目以外でも結構です。)



ア．勧められた イ．勧められなかった

2．勧められた科目は次のうちどれですか。

a)流通経済 b)商業経済 c)マーケティング d)簿記 e)会計

f)工業簿記 g)商業法規 h)情報処理 i)プログラミング

j)計算事務 k)簿記検定課外 l)総合実践 m)その他( )

3．その科目を担当しましたか。

ア．担当した。 イ．担当しなかった。

4．その理由を聞きます。次の中から該当するものを選んでください。

ア．担当した場合

a)事前(実習以前)にその科目を十分勉強していたので担当した。

b)事前(実習以前)に少しはその科目を勉強していたので、思いきって担当した。

c)事前(実習以前)にその科目は勉強していなかったが、思いきって担当した。

d)その他( )

イ．担当しなかった場合

a)事前(実習以前)にその科目を勉強していなかったので、担当できなかった。

b)予定されていた科目の授業実習の教材研究に時間がかかり、その科目の準備時間がとれなかったため、担当できなかった。

c)予定されていた科目の教材研究をする時間が減るのが嫌だったため担当しなかった。

d)その他( )

5．そのときのあなたの気持ちを聞きます。なるべく具体的に書いてください。

ア．担当した場合

【 】

イ．担当しなかった場合

【 】

それでは、学生は、実習期間中、どのような教材研究を実施しているのだろうか。

まず、それに費やした時間数であるが、1日平均2時間から7時間まで多様であり、中には「睡眠2～3時間で空時間全部」という学生もいる。大体3～4時間と5～6時間と答えた学生が多い。

またその際に、学生はどのようなことに留意して教材研究を実施しているのか。その答えも「授業のポイントの設定」という教材の理解の問題から、「導入の工夫」「生徒が理解できる言葉等に言い換える」「板書計画」「時間配分」という授業構想の問題まで様々である。

そして、その教材研究のもとで実施した授業実習において学生は、どのようなことに苦心したのだろうか。これに対しては、「生徒に考えさせる」「授業のポイントの理解」「基本へのフィードバック」「明確な説明」「見やすい板書」「大きな声」「生徒を寝せない」等の答えがあがっている。

SQ3. 実習期間中の教材研究（授業の準備）について聞きます。

1. 1日平均して何時間位使いましたか。該当する記号を選んでください。  
ア. 1時間以内    イ. 1～2時間    ウ. 3～4時間    エ. 5～6時間  
オ. 7～8時間    カ. 9～10時間    キ. 10時間以上
2. その時、最も苦勞したことは何ですか。次の中から、該当する3つ以内の項目を選んでください。  
ア. 全体(単元)の中での位置づけをつかむこと。  
イ. 主題(単元の目標、1時間の目標)をつかむこと。  
ウ. 分かりにくいところ、分らないところ、疑問に思うところを探すこと。  
エ. 説明の工夫    オ. 発問の工夫    カ. 生徒の活動や作業への指示の工夫  
キ. 生徒への助言(生徒が行き詰まった時の指示・発問・説明等)の工夫  
ク. 板書計画    ケ. 学習指導案の作成    コ. 教材(資料、プリント等)の準備  
サ. 時間配分    シ. その他(                      )  
ス. 何も苦勞しなかった。

3. その時、最も留意したことは何ですか。次の中から、該当する3つ以内の項目を選んでください。

ア. 全体(単元)の中での位置づけをつかむこと。

イ. 主題(単元の目標、1時間の目標)をつかむこと。

ウ. 分かりにくいところ、分からないところ、疑問に思うところを探すこと。

エ. 説明の工夫 オ. 発問の工夫 カ. 生徒の活動や作業への指示の工夫

キ. 生徒への助言(生徒が行き詰まった時の指示・発問・説明等)の工夫

ク. 板書計画 ケ. 学習指導案の作成 コ. 教材(資料、プリント等)の準備

サ. 時間配分 シ. その他( )

ス. 何も留意しなかった。

SQ4. 授業実習で特に感じたこと、留意したことを自由に書いてください。

【 】

SQ5. 授業実習で指導教諭には、どのような指導(アドバイス)を受けましたか。

【 】

最後に、教科ではないが「道德の時間」を取りあげる。

従来、「道德」を実習生が担当することは、比較的少なかった。しかし昨今の「中学生」の問題状況への対応として、「道德の時間」の充実が掲げられるようになり、その結果として、実習生にも「道德の時間」を担当させることが漸次増加している。

従って、「道德の時間」を学生が担当したかということの把握から、その際の指導教諭の指導の内容を分析することによって、大学の教職カリキュラムとしての「道德」の授業にフィードバックさせることが可能になる。

SQ5. 「道德の時間」について聞きます。中学校に行った学生のみ答えてください。(高校に行った学生は、次のQ4に進んでください。)

1. 「道德の時間」にはどのような形で参加しましたか。次の中から該当するもの

を選んでください。

ア．参観だけした。 イ．参観と担当をした。 ウ．担当だけした。

エ．参観も担当もしなかった。 オ．その他( )

2. 「道徳の時間」を担当するに際して(又は担当後に)指導教諭からどんな指導を受けましたか。次の中から該当するものをすべて選んでください。

ア．教材は慎重に選択する。 イ．教材はなるべく身近なものを取り上げる。

ウ．生徒に自分の問題として考えさせる。

エ．ただ説明するだけの授業ではいけない。

オ．生徒に「こう考えるべきだ」「こうすべきだ」という指示・指導はしてはならない。

カ．その他( )

3. 「道徳の時間」を担当(参観)してみて、あなた自身はどのようなことを感じ(考え)ましたか。次の中から該当するものをすべて選んでください。

ア．教材は慎重に選択する。 イ．教材はなるべく身近なものを取り上げる。

ウ．生徒に自分の問題として考えさせる。

エ．ただ説明するだけの授業ではいけない。

オ．生徒に「こう考えるべきだ」「こうすべきだ」という指示・指導はしてはならない。

カ．道徳を学校で教えることができるのだろうか。 キ．その他( )

#### 4. 学級指導その他について

「教育実習」のなかで、学生が、最も多くの時間と労力を費やすのが「授業実習」であるのは確かである。しかし、他の「学級指導」や「学校行事」や「クラブ指導」等が、学生にとって容易というわけでは決してない。それどころか、それらがなかなか思うようにならず、非常に悩む場合も多い。

まず「学級指導」で主に実施した項目に対して、「連絡事項の伝達」「ショートスピーチ」「体験談を話す」「2週間の感想を話す」から「遅刻指導」「給食指導」「掃除指導」「進路指導」「学級日誌に所見を書く」等、極めて幅広い活動を答えている。またその際、苦労したことや留意したこととして、「掃除を生徒がなかなかしてくれない」「生徒がなかなかやる気をだしてくれない」「生徒とうちとけない」「生徒にけじめをつけさせること」等から「連絡事項を正

確に伝える」「名前を覚える」「学級日誌を毎日添削すること」等まであげている。

Q5. 学級指導その他について聞きます。

SQ1. 学級指導(ホームルーム指導)について聞きます。

1. 学級指導(ホームルーム指導)では主に何をやりましたか。次の中から該当するものをすべて選択してください。

ア. SHR イ. LHR(学活) ウ. 遅刻指導 エ. 給食指導 オ. 掃除指導  
カ. 学級日誌等に見所を書く キ. 進路指導 ケ. その他( )

2. 1でアとイを選択した人のみ答えてください。

ア. SHRでは何をしましたか。次の中から該当するものをすべて選択してください。

a)朝礼 b)終礼 c)連絡事項の伝達 d)ショート・スピーチ

e)学級名簿の点検 f)その他( )

イ. LHR(学活)では何をしましたか。次の中から該当するものをすべて選択してください。

a)大学生活について話す b)自分の高校生(中学生)時代のことを話す

c)生徒に伝えたいことを話す d)2週間の実習の感想を話す

e)その他( )

3. 学級指導で最も苦労したことは何ですか。次の中から該当する5つ以内(その他も含む)の項目を選択してください。

ア. 連絡事項を正確に伝えること

イ. 生徒を静かにさせること(私語をさせないこと)

ウ. けじめをつけさせること エ. 生徒とコミュニケーションをとること

オ. 生徒に平等に接すること カ. 生徒の立場で話すこと

キ. 生徒を傷つけないようにすること ク. 掃除をさせること

ケ. 生徒に注意をすること コ. 生徒をほめること

サ. 生徒をしかること シ. 生徒にやる気を出させること

ス. 「学級ノート」等を添削すること セ. 名前を覚えること

ソ. あまり学級指導に参加させてもらえなかったこと

タ. その他( )

4. 学級指導で最も留意したことは何ですか。次の中から該当する7つ以内(そ

の他にも含む)の項目を選択してください。

- ア．正確にメモをとること    イ．大きな声ではっきりと話すこと  
 ウ．生徒の顔を見て話すこと    エ．正確に連絡事項を伝達すること  
 オ．生徒に私語をさせないこと    カ．生徒をじっとさせること  
 キ．生徒に自分の話を聞かせること  
 ク．休み時間とのけじめをつけさせること  
 ケ．生徒とコミュニケーションをとること    コ．生徒の立場(目線)で話すこと  
 サ．生徒に対して教師としての態度をとること    シ．生徒に平等に接すること  
 ス．生徒を傷つけないようにすること    セ．皆に掃除をさせること  
 ソ．生徒に注意をすること    タ．生徒をほめること    チ．生徒をしかること  
 ツ．生徒にやる気を出させること    テ．生徒たちに共通の意識を持たせること  
 ト．「学級ノート」等を添削すること    ナ．生徒の名前を覚えること  
 ニ．指導の時は必ず担当教諭の許可を得ること    ヌ．その他(                      )

実習生は、多くの場合、「クラブ活動」や「部活動」の指導に参加するように、指導教諭等から指導される。その種類は、運動系と文化系があるが、ほとんどの場合、中学校・高校時代に自分が所属し活動していたクラブや部の指導に参加している。ただ、商業高校の場合、簿記検定等の準備のための課外指導に参加していることも比較的多い。

そして、その指導に参加したなかで感じたことは、肯定的意見として、「授業以外の生徒の姿を知ることができた。」「自分が教えていない学年の生徒と親しくなれた。」「生徒と一緒に汗を流し、充実した気持ちが味わえた。」「生徒の方から話しかけてくれた。」等があげられているが、反対に「生徒のレベルについていけなかった。」「教材研究と両立するのが難しかった。」という意見もあった。

SQ3．クラブ活動(必修クラブ)、部活動(課外クラブ)について聞きます。

1．どのように参加しましたか。

- ア．運動系クラブに参加した。    イ．文化系クラブに参加した。  
 ウ．運動系クラブを見学した。    エ．文化系クラブを見学した。  
 オ．見学も参加もしなかった。

2. 1でアとイを選択した人のみ次ぎの問に答えてください。

ア. どのような運動系クラブに参加しましたか。

- a) テニス部 b) バドミントン部 c) バスケット部 d) 卓球部 e) 陸上部  
f) サッカー部 g) ラグビー部 h) 野球部 i) 水泳部 j) バレーボール部  
k) その他( )

イ. どのような文化系クラブに参加しましたか。

- a) 美術部 b) 演劇部 c) 茶道部 d) 放送部 e) 生物クラブ f) 物理クラブ  
g) 情報処理部(ワープロ部も含む) h) 簿記部 i) 珠算部 j) 簿記検定課外  
k) その他( )

ウ. 参加したことによりなにか良かったと思いますか。該当する3つ以内の項目を選んでください。

- a) 授業中とは異なる生徒の一面がみられること。  
b) 担当しないクラスや学年の生徒とも親しくなれること。  
c) 生徒が頑張る姿を見ることができること。  
d) 生徒とコミュニケーションがとれること。  
e) 生徒と一緒に運動(活動)ができ充実感を持つことができること。  
f) 放課後を有効に使えること。  
g) 授業や学級活動等より、比較的自由な雰囲気を味わえること。  
h) 実習終了後の指導を、先生や生徒から依頼されたこと。  
i) その他( )

エ. 参加したことにより、何が悪くなったと思いますか。2つ以内の該当する項目を選んでください。

- a) 生徒のレベルが高すぎて指導できなかったこと。  
b) 指導の先生の方針に賛成できなかったこと。  
c) クラブ(部)の雰囲気になじめなかったこと。  
d) 生徒とのコミュニケーションがうまくとれなかったこと。  
e) 十分な教材研究をする時間がなくなったこと。  
f) 体力的に無理があったこと。  
g) その他( )

最後に学校行事への参加であるが、実習校や実習生毎に異なるが、比較的多様な行事に参加している。具体的には、「生徒総会」「全校集会」「進路説明会」「就職説明会」「地域の掃除活動」「一汗運動」「田植え」「セミナーハウス



研修」等に参加している。

そして、その時の気持ちとして、「生徒と遊んで楽しかった。」「自主的に掃除する生徒に感動した。」「生徒と一緒に考え行動することで勉強になった。」等があげられている。

SQ4. 学校行事について聞きます。

1. 学校行事に参加しましたか。

ア. 参加した。 イ. 参加しなかった。

2. 1でアを選択した人のみ次の問に答えてください。

ア. どのような学校行事に参加しましたか。次の中から該当するものをすべて選択してください。

- a) 全校集会 b) 生徒集会 c) セミナーハウス研修 d) 進路説明会  
e) 就職説明会 f) 避難訓練 g) 交通講話 h) 学校の清掃活動  
i) 地域の奉仕活動 j) その他( )

イ. 参加したことによりなにか良かったと思いますか。該当する3つ以内の項目を選んでください。

- a) 授業中とは異なる生徒の一面がみられること。  
b) 担当しないクラスや学年の生徒とも親しくなること。  
c) 生徒が頑張る姿を見ることができること。  
d) 生徒とコミュニケーションがとれること。  
e) 生徒と一緒に活動ができ充実感を持つことができること。  
f) 生徒の集団活動上の教育的問題について学ぶことができること。  
g) 授業や学級活動等より、比較的自由な雰囲気を楽しむこと。  
h) その他( )

## 5. 実習全体について

まず、「実習での苦労とそれに対する努力」であるが、この項目に対する回答は、大きく分類すれば、「授業実習に関すること」と「生徒指導や学級指導に関すること」にわけられる。しかし、その内容を詳しくみていくと、当然ながらそれぞれの学生により、細かいニュアンスが異なっている。

例えば、「授業実習に関すること」を記述した学生の回答は、次のようなも

のがある。

「授業の進め方が思うようにできず、大変苦勞した。前回失敗したことは二度と繰り返さないように、良いと考えられることはすべて授業にとりいれた。」「最初、生徒が授業を理解してくれなかった。板書を工夫しても理解してくれないと思ったので、数名の生徒に劇を演じさせる授業を実施した。」「授業に面白さがでない。発問しても生徒が答えてくれない。教科書から離れた授業を展開してみたかったが、その余裕がなかった。発問はできるだけ生徒に答えやすいように心掛けたが、授業に関しては、結局解決できないままに終わった。」

一方、「生徒指導や学級指導に関すること」では、次のような記述がみられる。

「掃除を生徒がやってくれないので、自分が率先してやるようにしたが、廊下やトイレにたむろするばかりで、ほとんどやってくれなかった。強く指導した時だけは、少しやってくれたが、最後まで、自主的に掃除をするようにはならなかった。もう少し、生徒に近づいて指導すべきだったかもしれない。」「3～4時間目に登校し、保健室ばかりにいる生徒にどう接してよいかわからなかった。保健室に行き、ひたすら話しかけた。」

以上の記述からは、選択肢形式の質問ではどうしても読み取りにくい「実習生の正直な気持ちや思い」が、比較的ストレートに伝わってくる。従って、このような項目は、記述式で自由に回答させることが必要であろう。

同様に、「実習での喜び」といった項目も、自由記述形式の質問にすることが効果的であろう。

Q6. 実習全体について聞きます。

SQ1. 実習中、最も苦勞したことがあれば、具体的に書いてください。

1. 実習中、最も苦勞したこと

【

】

2. そのとき、解決のためにどのような努力をしましたか。

【

】

SQ2. 実習中、最もうれしかった（楽しかった）ことがあれば具体的に書いてください。

1. 最もうれしかった（楽しかった）こと

【

】

2. その理由

【

】

次に、「実習体験から学んだこと」というべき項目について考える。例をあげると、「これからの人生において、この実習を通して学んだ積極性や話し方等、吸収したことをどんどん活かしていきたい。」「何事も一所懸命にまじめにすれば、生徒はそれなりに答えを返してくれることを学び自信がついた。」「1日の時間がどれだけ大切かということを思い知った。」「とにかく集中して勉強した。教えることが、こんなにも難しいと理解できただけでもよかった。」等、多様な回答がみられた。

従来、学生は、「教育実習」を経験すると、大きく成長するといわれてきた。確かに、教職担当者だけでなく、日頃学生と接している大学の教師も実習後の学生の変化に同様な感想を持つことが多い。従って、そのことを、学生自身が、具体的にどのように感じ・考えているかについて分析することは重要と考えられる。そして、その場合の調査票の質問形式は、やはり、学生の考えや意識といった内面の問題を詳細に読み取る必要性から、自由記述回答が望ましい。

SQ3. 教育実習の体験は、あなたにとって、どのような意味を持つと考えますか。

できるだけ、具体的に詳しく書いてください。

1. 教師になるための意味

【 】

2. 人生にとっての意味

【 】

最後に、『教育実習体験』の以前・以後の、学生の持つ教職へのイメージ等の変化」を調査する項目について考察する。その回答の例をあげると、「教師の責任の重さと多忙さを実感した。」「思った以上に教師が多忙すぎて、いじめ等の問題にも十分対応できる余裕がないと実感した。」「ただ授業をきちんと実施すればよい仕事だと考えていたが、生徒指導や学級指導の他、校務分掌等の仕事も行わなければならない、大変ハードな職業とわかった。」等、生徒のときには見えなかった「教職」の実態について理解できるようになったという意味の記述が多い。

「教育実習」体験は、学生自らが、教職への資質や適性を有しているか否かを真剣に考える上で、大きな意味を持っている。概して、「教育実習」を体験する以前の学生の教職への考えは、それまでの生徒としての体験から一方的に構築されたものが多い。それゆえ、主観的なイメージや考えに偏する場合が多い。しかし、「教育実習」体験後は、事実を客観的に捉えることにより、それまでの自己の教職への考えやイメージを変化させる学生もいる。なお、この項目も、自由記述形式の質問を用意することが必要であろう。

SQ4. 教育実習前と後を比較して、教師という仕事・学校・生徒等についてのあなたのイメージや考え方に变化した点がありますか。あれば具体的に詳しく書いてください。

【 】

### III 今後の「教育実習」研究に向けて

以上、本論文においては、「教育実習」研究のための調査票調査について論じてきた。

その際、「教育実習」調査から得られるデータを、選択肢形式の回答による統計処理できる「量的データ」と記述式形式の回答による「質的データ」に分類し、それぞれの特徴を分析した。そして、「量的データ」だけでなく、「質的データ」の詳細な分析が、今後の「教育実習」調査研究にはより重要となることを考察した。さらに、平成8年度に実施した本学の「教育実習アンケート」の分析を基に、「教育実習調査票試案」を作成した。

しかし、「教育実習」研究において、「教育実習」という貴重な体験による学生の内面のプロセスを、より詳細に分析・考察するためには、調査票による研究だけでは十分とはいえないであろう。その際に、有効な方法として、「実習記録」等に記述された学生自身の思いや考えを丁寧に分析することが必要と考えられる。すなわち、「質的研究法」である。この「実習記録」等を考察の対象にした研究もいくつか存在しているが、今後、このような研究方法がより一層蓄積される必要がある。

また、最近、「授業研究」や「学校研究」において、エスノグラフィー法といわれる「質的研究法」が、大きく展開されている。すぐにこの方法を「教育実習」研究に取り入れることは、「教育実習」のもつ性格ゆえに多くの課題

があるが、今後やはり重要な研究方法として考察されるであろう。

なお、本論文において基礎データとして利用した「平成8年度教育実習アンケート」の質問項目は、本学教職課程の市来努教授が作成された「教育実習アンケート」を参照して作ったものである。本論文での使用を快諾していただいたことに心から感謝したい。

## 参考文献

1. 岩永久次 1996 「教育実習の意義」『熊本学園大学 教育実習の手引き』2頁
2. 盛山和夫, 近藤博之, 岩永雅也 1992 『社会調査法』放送大学振興会
3. 岩永雅也, 大塚雄作, 高橋一男 1996 『社会調査の基礎』放送大学振興会
4. 見田宗介 1979 『現代社会の社会意識』弘文堂
5. 高根正昭 1979 『創造の方法学』講談社現代新書
6. 牧野暢男, 村松幹子 1993 「卒業生の大学評価 一日本女子大学教育学科の事例一」『日本女子大学人間社会学部紀要』第4号 249—260頁
7. 村松幹子 1995 「卒業生の大学評価(2)—ライフコースとの関連を中心に—」『日本女子大学人間社会学部紀要』第5号 293—304頁
8. 野島一彦 1984 「福岡大学の1983年度教育実習生へのアンケート調査(I) —実習概要, 実習経験のインパクト, 教職への指向性について—」『福岡大学総合研究所報』第73号 37—61頁
9. 若原直樹, 佐藤定秀 1984 「本学(旭川)学生の教職意識と教育実習の効果に関する調査(1)」『北海道教育大学紀要(第1部C)』第35巻第1号 1—15頁
10. 曾我雅比呂, 河野昌晴, 村島義彦, 小山悦司 1984 「教育実習に関する比較調査研究」『岡山理科大学紀要』第19号B 101—131頁

11. 平岡清志 1995 「教育実習による『教職』への意識変容およびイメージの変容」『姫路独協大学教職課程研究』第5号 31—55頁
12. 徳岡慶一, 田中邦明, 園山和夫 1995 「北海道教育大学函館校における教育実習改善の試みⅣ—平成6年度教育実習(主免)に関するアンケート調査結果(小学校実習)—」『北海道教育大学教育情報科学』第23号 199—208頁
13. 藤村正司 1998 「国立大学大学院の現状と課題—国大協調査『自由回答』の分析—」『広島大学大学教育研究センター大学論集』第28号 99—115頁